

科学研究費助成事業（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	25220201	研究期間	平成25年度～平成29年度
研究課題名	乾燥地災害学の体系化	研究代表者 (所属・職) (平成30年3月現在)	篠田 雅人（名古屋大学・大学院 環境学研究科・教授）

【平成28年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準	
	A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○	A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	A-	当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である
	B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である
<p>(意見等)</p> <p>本研究は、寒冷で乾燥したユーラシア内陸部で発生する干ばつ、寒雪害、砂塵嵐、砂漠化の4種類の災害を、発生機構と時間スケールから統合的に把握し、リスク評価を確立して、最終的には政策提言につなげようとするものであり、いくつかの重要な進展があり研究は概ね順調である。</p> <p>寒雪害と家畜死や幼児死への連鎖が実証され、黄砂ハザードマップや砂漠化評価、植生変化に関する成果が上げられ、4つの災害に関するデータも着実に蓄積されている。国内外に対する研究内容の公表も積極的に行われ、研究上で生じる問題も適切に解決されている。これによって能動的災害管理を確立し、乾燥地途上国の生活基盤の向上に貢献しようとする最終目標も達成できると見込まれる。</p> <p>なお、モンゴル国での知見が、社会経済・政治体制の異なる内モンゴルやカザフスタンを含むユーラシア内陸部の乾燥地にも通ずるような成果に結びつくことが期待される。</p>		

【平成30年度 検証結果】

検証結果	当初目標に対し、期待以上の成果があった。
A+	ユーラシア乾燥地の4種類の災害についてのデータを蓄積した上で、それらの関係性を検討し、それに社会脆弱性マップを組み合わせた統合リスク評価を行うことに成功した。本研究によって構築されたリスク評価モデルは実用性も高く、災害と被災主体の脆弱性の体系的分析による災害の統合的管理に寄与し、政策提言を行うという当初の目的を実現している。さらに黄砂ハザードマップの世界的展開、黄砂発生と日本の健康影響予測についての成果等、当初予期されていなかった研究の発展もあった。研究進捗評価で、研究成果のモンゴル国以外への展開が期待されていたが、これについても着実な進展が認められる。